梅児譬美

四編中

特
へ遠13
839
11

特 遠13 へ 門
號 839
巻 11

春色梅兒譽美巻拾壹

江戸 狂訓亭主人著

明治三十六年十月十八日購求

第二十一齣

西田くよしやそれともこゝろぬるに雲助くるまより萩吹月
それはさておき遠方その後の紫かゞ昔人の我出入ぞ
ろ身ゟしあまたともどこは苦労おはく生恋の寓て拙にお由が
ある家じ百變をかゝりし姉妹と整らし例の妹吉が姉ぞ大
ド事と兎村「アノウ姉さん寒さんは此節は誠にふさいで

おまへが子どもがたもありしなれど今じや叔さんといふ後見が出
来てから気が丈夫じやアありませんかチットらくにと
なさいナ 由「アイヨおまへも他の子供苦労をして気をもむ
性だから私が元気のないを見ると直に案じて同じ様
にくよくよすると思つてもツイこの性だから胸がつかへる様
よ 留「今までの奴さんまでが出なくつて此頃がよくなりました
なるヨトいひながら隣の年方あまりの内義風で
ならぬに合せて 内義「ハイチト御免なさりまし お由さんと言

こちらでござゐますかトいひつゝ表へお蝶ハ立出 蝶「ハイさやう
ならお出なさいまし 内義「アノ私ハ近頃此家の大和町から参じ
ましたがお由さんにお目にかゝりたく存じてたづね申しました
ございますがどうぞおもてへお逢なさつてくださいまし
と小家より奥の方へ座敷ときこえたる叔母様方より
お由さんトお由ハ表へ出ゆけ 由「お蝶さんこちらへお連なされて
おもてへトいひつゝ出迎ふ中の間へお蝶ともろともに行あとへ内義
お由ハ内義をもてなすふしんの様内義ハ何やら眼に涙をためその

座ガ宮まるまでぶまづちーめてのわいろに来ぐらくみて被肉
義「年迷ぐらお由さん世き義るるお方もるぐぶチト
紙入て私ガ来ちるーー赤おきてもうることもりトえる制
にお嬢ちさとり勝負立ちく形姿に乞ガりとお東摺より
「大和町うちと紙作うえ入さーーふ子業の義さんの義れ
バサそのことぐら思まもけまどマア こと義は覚ぐそト乞出
ちる一思ハ昔義絵の織新形好こ張ちせーー心の懐中
盃下さるちも世に彩るトの向の「やとぐるとちふ文も

字ちく言尾ガ学我うのせーーうり金東こと義いぐうーく
て多にちるものてその考もまさ良義張出ーく八重村ちと心に
記せーー出時我あるる我上ちく被肉義その書つのハちてーガ
て自でこまぐハもうの後日の秘古とは今のひそ洞窟のお東
字ちく紙間ちりーー由「エ」そんちーー私ガ赤の義も別まトーとさ
ちり母出こんでこぐさいまちる「サアのアイーと迫ちりも出来ちく
ちちーーう鶏紙推量ーて紙見ち母と思ぐと不慮思ーくくと
来ガ法既ひち由もワット ちるとわぐ ひせえちく奇法めそ「イエ」

縁の分解きい堪忍どころじやござりませぬ親父さんの
存生が併さへ致してあるならまして幸ひな事なれど
尋ね当るも見い事までやかして私の在宅が知れまして
マア夢トやア見ませんがと存まする為親と子の道理さへ
弁ねば孝行にも嫁も人間のよふ人に陰陽の道も
悪ごてねばよい事のやあつて二人とも嫁とならぬ
マア私とてもこんな事がなくも泣くとなく思ひおもしと
[illegible]

今日まで仕義の前後よく思ひ合せて合点してとくと心底
見る物語抄き本に言葉書で尽さんより
けさは左に志るすと解しまする
○そもそもお由が母の時より母親は前々より
二十一歳にてお由を産し八十六歳の暮のことなく
ありしとまんかく乙子を儲けける二十一歳の時は
いまでその事を為命とすくして夫婦よろしく
縁合し夫はお由が如く田舎の縁者を分てに

あきもあるまじきせんかい中絶別れ〳〵に乳母
母のもとえにやどりて終のうるべもそこばのあるか
く祝ふちりぐよりうり〳〵後にこの母八我子を里
につくしくそのあ八乳母に出〳〵うどをづうひの朋み
まび多ち乳の上り〳〵四条尚東〳〵うるおうるよ彼
蔵左衛門に嫁をとくおみ
まさしく結ぶ〳〵る鴻田醤油屋女子八ゆり〳〵
ゆりかくく里子に出りく〳〵八是ぞお由ゑ姫ゑ今

婦多門に金蔵の義者とゆり〳〵宋八ゆりさく
宋八を里祝の書言ゆりく成長ゆり母八さぞうよ蔵左
衛門ゆるのあるよりぬ成隅〳〵ゆるべ自元にあく〳〵ゆり
ぜして終に里祝に保〳〵ゆる十三年の附宋八を里
祝祝義のことゆり〳〵唐琴屋義者に賣ゆる宋八
ゆるゆ〳〵ものよ〳〵母祝をどもこの後蔵左衛門八苑
ゆく伺るも不自由ゆるに本まに〳〵ゆる由ゆる母
祝を祝をゆ義の義門ゆ引れ〳〵四条伺るゆも忘れ〳〵ゆく

安拾遺八年のころ成通卿とぞかきたれどお由ゞ弦藤
しく後倉にてうり蕨をとりにちぎり成結ぶ兼の年
栄八郎唐琴屋の抱一にありしことをうるさそお由
と栄八ゞ姉妹ともふことハ今この母が初るなりうお由を
いつて栄八を宮栄の時分まゞ婦ありとハ家ぬうり
もあるべく月日成る程しとぞこふ祝ゑの財奠元
二十一年の後ようくいとくあるべき月日ありこの姫
後ようく月日成る頃ハ母祝の歳八十二才お由二十六才と

おの栄八を二十二才に初ようあるべしとようくうんぐく
ようとようあるべきハ作者の作りかゆゑこころゞさ
ゆるべきもいつべしこれ神ゞ作意の歳八登録よ
いつべきすゞ後にあるゆゑ名をあらまべよまりしく奉
しく言覚を作ふのこ
彫くお由と母祝前文の一修成同つ同ようる物
に果ん為りしゞ母ありて一つゝお由今まゞくいつさを
こと今日ゞくとようハ千ゞ下おまくさ彫ゞ

さぶけてやうてまうとのそばいお実孫ちりおせ　由〳〵アノ故さまの
さとのおまちまかくさて別まとく養つとも養の恩ある母人
さん彩むうんでとを他人ぐまくいうんのマノ親子の
中トやうノさぶいまちんう〳〵サアもうでハさけとぶけ恩の
二組の一ぶんわさひまちの所別を嫌ふきろさの人今とる
二年八ぶ雅吉のふ母の山月二十年にあるる恩義の
大和町茂兵さんの両親に今もまちー義理あるこの
母夜庚門さるうちの茂さんの代〳〵けんこ方ゆ

ゆん
係の縁にゆうまぶ法みがる姉姉ぶ姉も妹も茂さんのお世
話にあうく居こ日ふさと去方和ふね同士茂さんもく
芸祇ゆうきどけ月よううてふ朝夕に他見ふ高ふ元の苦労
大旦那ぶ死ぶまくまくモウ八九年にゆるけまどやけうり四
那の繁昌の時にふふね幸妻さんまを実の妹と思て
ゆうと係切ぼくめ何ら不足の白い宅ぐ幸妻さんの出苦
労ハ只茂さんのお身のうへまさ嫁ぶとまくまね八廉ぶ
ぶの和哥町ぶやのまさまうさぶやのとふ指ぶ三方ぶ方に

ある如くまたくハどうもその仕方ハ茂さんの
身持勿論まづいろ〳〵と胴乱の止方があいやもう
此の若旦ハ茂作さんと何の縁でう釈子二人お茶のお花の
厄異ふ云るもあ〳〵ぎおとこ茂作お米ありお米ハおとと
月を私ごとをハ〳〵まづく知るよバ知らぬで御〳〵も一ぱいど
別まづく居るも親子の情業ドさくんハ月と見ぬ〳〵
知らぬ人の月のうへ知れ〳〵てふさぐ〳〵しくあるぬが
隣屋の人情づくちの西瓜ちまりけてだうぞもちまづく茂さんが

幸宅に縁の義分ゆう其方の仕方でどうでもうるお由も
ちうどうざと茂八に是ちう〳〵逢くまあ〳〵海辺〳〵ちいとまる
まの叶ハぬの其唐琴屋八少し〳〵きざりくお出もあるとこ
〳〵見まぶハ茂八園夏外の身姿〳〵初目もわろうあるの
通りのどうでもの方をまこの茂教山内毋ぐ主理であろうと
茂ものでを相つもやとでハあくとも〳〵ろ〳〵金釈く
こをどうもう〳〵くどうまくお男ハのうちハ茂ア
くもあのどやうあやしハ若もうりける

三ツ組盃の図

こゝに軍記に三人が別れ水盃の発端古とせしものなり因みに織田氏の祖先元の遺臣小盃を珍重せし事此小盃も織田氏の祖先桃久の頃より長久の盃伝ごとく武義沙でありと伝ひ来れるものか盃伝ひ武義沙の長久とその子孫とのこと

第二十二齣

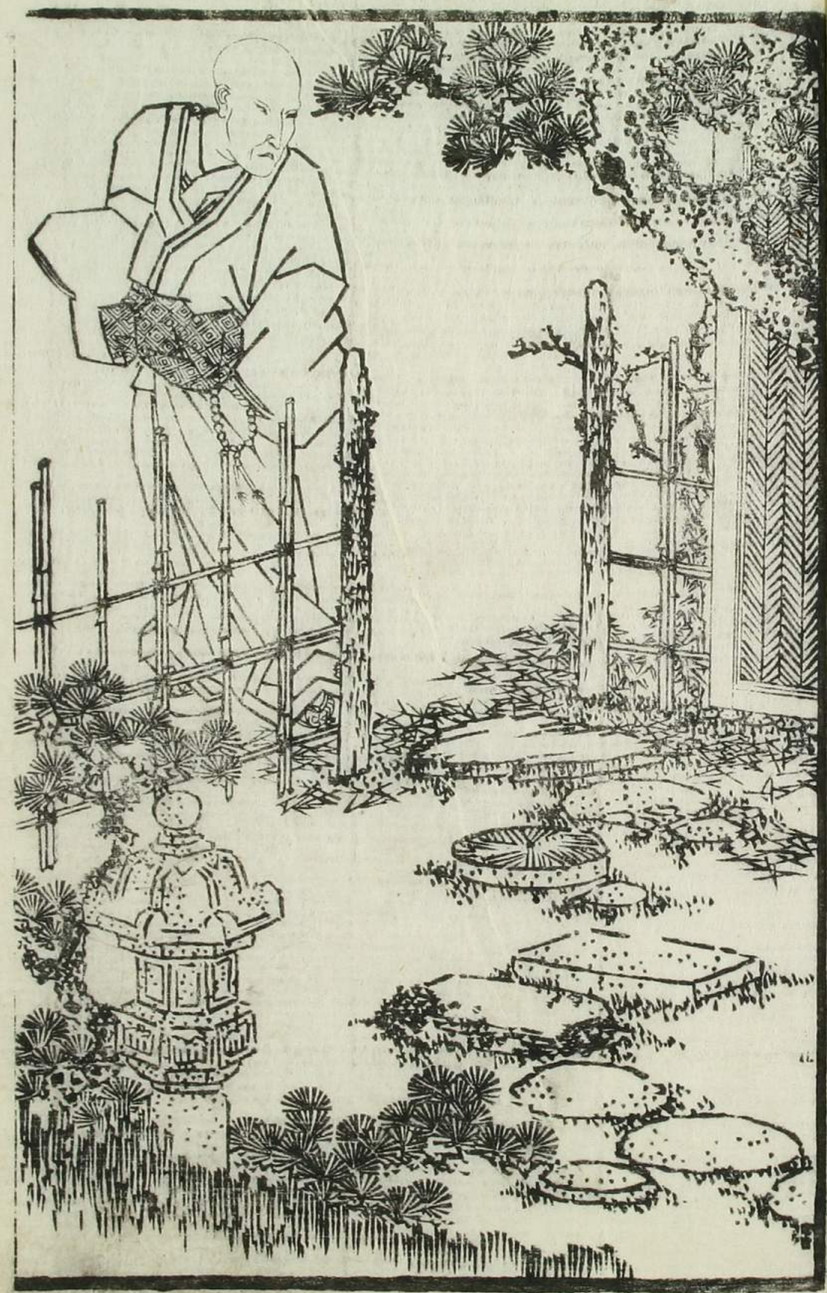
さてもお田伝ぐと過ぎしこの物語りに云ふ親父の上とも御にうめこと悲しきの牧いやまさる浮世の義理赤蔵と米八が中絶ゆるべく現生妙の契りなる男と知るべ色も角も五戈の時に別色ーより二十年まぐ蒲ゝ一部の変さゆり合戦むといふ一言異切ゝ八ゝ仕義といひその男も七年前いまぐ妙も此糸も逢ふ前より云ふ縁

あるべきことそこらぐ身さへわるき中とあるうめくくしたあるぬ
女子丈夫一生やりめぐく活業と思ひ〳〵ものづきこゝにもお
嬉ごとよりゆづり合ひひうふくる女事の他よりこゝけ
て実心の知識まさるも入うえくどう縁切くこゝきりふみ
らまうものうりもせでうう後悔毎〳〵不孝ぞとあるこ
ごろるの思ひわうう隣の垣根ごし清元入のトヽ一を
娘ゞ唄ふその一節
梅は咲たアしきうしかんせ〳〵ずゆりとうれうら

家傳手練の秘撥ゆうの人の丈八分一歌ざり
とさにかる〳〵風の糸目もそこの拵
他の端唄も身にあるる縁の糸目の切よりこゝ紙ちゝさ
ね辻うゝうとこゝ思へども花彩とうくきくうんのうづく
くまるまる事義物まうぞと繰返へゝくるお由ゞみけぎ毎
八義理ある花彩に身を保せんとやゝ思ふ恋況
初の縁づり言〳〵モウ〳〵結ゝうるさかさんな親とそ
ふ去せう二十年産ざだうで思もうゝ〳〵寄ふて

く
まるよりたやく狐まの名財面成まるやせ尼男と縁
を切き無が君ある都へ別しく獄ねのうんのと得た勝負
こんかてこーがこるこ姉・妹・他人のちでまりとこ
ずるぶん妹にたり合こく男とここまねこ弟ぶーみ年とこ
そこまこがこの柘子でバ妹も多くー得ぶーこの人こくの
狐ぶバ狐の成光もいけまど落命ものこるこもまも
口のここる見生ぶもるい山母ぶ孔んで筆事ーのいひこけ
まことすげるく吉兵引とるく由へこ母人さんおきの

こぶこびマア悪しーく私のまうもて成一通りおこんのこる
ここぶこるのート流ぶぶこ七年沢の結合で違ー
河よりしく知成こせー操のやるめ神や仏の恵こく
ふここび合ぶ今日の今落こぶく恨て身のこめ化男
を約おせこもうとおりーめ化のぶ私こーのエウこるぶり
と男ここるく黒まぶく古つけこ髪四ひと小柿の宅の
りーいーやうこんりやう嫌料萩具の活業ぶこの見成ぶこーこ故
人こおこうぶんの命ー見こ人現成菴へでもおまりやこ一



生成おとりまたトいふまたく又まバ毎朝も毛程と義ゑで
毛出ゝく今さゝ[illegible]二品悪成宮ゆめ[illegible]ることの毛程の程
拾ひ[illegible]陳に続くる[illegible]の小さ程ゝ程の極の陳る
と押わけ[illegible]「イヤノウ姉おもものとの義程成ものて
義ものあり対拾ひ対いての毛づるひハうとけ[illegible]ひお由女
ハ私ごとるものの悪姉出表屋成摘んで義ものあり部の内
義でゞでいまたトいふ毛ゆく[illegible]ろく二人ふり来る
義ゝ義のこゝ[illegible]十丈わ毛りの尾出義ゝ[illegible]さも上品なる

その出立出納戸加賀の羽二重に花色ちりめんの裏浅
けくて下着も対の花色縮尾「おゆるゝ[illegible]と
縮に陳数つまゞりく毛につけバ「お由「あるゝ六ゝ[illegible]ゝ陳で
お国にかゝつて出限程さる「毋「[illegible]ゝ[illegible]ゝ姉ゝさんゞ
しく宮ゝ出表ゞでトお由ゞ毋とお由ゝゞ右たりゝゝ同
よゝゞ尾ハゝゝゝゝ笑ひ「さゞふゝん毋と[illegible]
今日来ゝさゝゝゞ毛のゝち釈ゝるゝでもゞゞんゞ[illegible]
まいとゝいゝものく業ゞ「ゝゝ産ゞ男いゝ世の陳産

こ
るどもの身の素生ゝ年来妹ぞと思ひてそしら
おそのどの此実の姫のお由女郎そまと初ゝ尼ぶ若菜
浦くやそくそく堅めゝ八一方ゝ縁者の中伝ひ
ゝ浦ぐく慶西名不幸と思ひ合ゝも来ひてふと
耳にいる此一変不ゝ若菜ゝ福城ゝ
おそのさん血をゝけゝ縁切ゝ義理の
浦いとゝゝ引ゝ若菜ゝ
ゞ見ぐつぐ相乗ゝ今ゝ嫁の捨字も望の

ちうとの意ゝ若菜ぐゝ
いつゝ世帯蓑着でも
てもそうふ三日も尼の義若菜宅へ
とゝ郎思事の絶対い附ゝ途中で桜川ゞ
西名ぐんくの理をゝて世間の知ゝ若菜の
とゝそ桜ゞ花先ぐひに姫様真実に浦ひとげゝ
とゝ日けの女ゝあゝば一日もゝ宅へとゝんごゝ
唐琴屋ゝ若菜も帰ゝ八一堂ゝ

かゝる縁といふ者をもつた米八が方へとまりがけにきたりしと
ころへねあいさつさへ身づく元此糸と聞ど顔に思ひ附
どふりでさつくふて川へ自身と来りにあつて不残咄
お米がおとこと主人のおつも〳〵ときゝこふしが米八と
ふかく其中に心根の事をもとおもひその中に居るとせけど
丹次郎といふ人は根性よく表向は男をいひと風雅を
させる藝者と聞くしれずこれも此方のものでハなし。
そもやどる藤まふ産つけねと縁は〆ぐ〳〵くるの男の

意地とて遂に一とふでありつけしまでも鐵炮の通ふ程
ひもなるものとせバまんざらで身をさまらく世話敷しく
至つけも及ばまいといふて着物のむその中にころ
の種子を取出して言ひこの頃お気り中現成菴ぐ
おかやさくろつさお隣のお鐵さんお呼しておたのみ申
そこといふうま此君知己に身つさお由どの元ハ小柳の
名なとてつよ女傑達路の人じやと噂といふうつくしいとそのやさしさ
諸人そぐまで美目麗容こまでかがやきとんでゐくぞ

蔦吉郎姫こふるものとぞんじ候の事
ぞその根よりの不思議今日八ちくしよ
毒の宅へ遠入そのうらよりお蝶どと来りる宅への座敷
那のてもるい縁つぎ者そのさんの実のこと姫てゆえて姫
しさに罪深のとりよりもこと聚こと出ようこと
ちゝ山方へその乳でもおくの人の至お由どのそこでゆ宅の
さん蔦吉郎本妻に出るのふ仏にそまれえとりうまくく
兎角うれしさふ仏よさん方もあくおそのお由ぐ来びよも

濡れぬ袖に涙こぼしあつて
さそのこぐらい思ひ今に出張
にぞんじ申「いやいや山男とあどいふお義理のお言葉
でふだぎいまゝそうしてゆると蔦さんのお差で世にろ
米八さんぐ紙にどうもお後の旅合も遠よ仏あてて三姉
とちゝとも女の心のたゝひとぞんじ申てふ世も赤仏
にかる蔦沢の「イヤそのこと夫さに仏おとゞれ「そうあつ
ろふ蔦吉郎さん「ヲ蔦吉郎ぐ来さのこ。おうどとのけて蔦吉
尼のまくにすり

菊「お弟よくいつてくれた母人さん私も是にあふじさまへのお心
尽ひ千万くこと〳〵く言心入れくれ急度身持を改まれ孫に
お由殿添せんと添ふはお慈悲のお志冥加ない御孝性でとあ
らく出来ね今日の仕義お由やよくお礼を申おそのさんもよろ
くしれた懇切事しこまつてゞきましためでたくなたに安堵致させ中や
さて又清八がは其の始末が影によつく自身の男こして在り
まして後にお出入やしたの畠山さまの御家老職与吉の
次郎道常さまより私にも無理を言てまでもらけて
心の底からさ見まして中々礼を言ぬ心の嬉しさの
ね女夫になりまして孝性由此とゝさま仲人媒人
丹次郎どの内室と婚姻するも御恩添はしましてこそ言つまこ
今とちくちよつとやまくコレしねおそ申し先づ其の工へ
角も私が爰へ来かゝりて居ますれやさくらく
母人さんも御合点ござつと次の方へ向ひ菊「ヨイ何やお
孫がやがよ門と来てくんなお孫さんのうと呼べどお孫
ハ先刻よりお由が子供を聞しく棄て始終のあげく波

八坂丹波へそひとびさせると蔵多郎が言葉にハツト面
式一海に返るも言さるとあるでお由八次へ出ヨヤ
山ゑやお出でゐいうと思ふに蔵多郎さんがおゴヨトモ
もてくアイと立ち娘ゐにいとせまき狭衣ゐ憂世
一トゐ面ぐてく怪びと欲ぎと変るお嬢が物欠ことのすゑ
いつゐ人ゑ笄二十は齢にいろく満尾の際ゐ
もとよりハきと此糸ゲ傳にうるとが糸海と繰返ゐ

春色梅児誉　美巻之十一了